

小学校第2学年音楽科学習指導案

山口大学教育学部附属山口小学校

教諭 石田 千陽

1. 単元名 身の周りの音に注目してみよう ～虫の声～

2. 単元の目標

- ・曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりに気付き、自分の歌声や発音に気をつけて歌うことができる。 (知識・技能)
- ・感じ取った曲想を基に、歌詞の表す情景や気持ちから、どのように歌うか思いをもつことができる。 (思考・判断・表現)
- ・生活の中の音や音楽に興味をもち、積極的に歌唱活動に取り組むことができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 評価規準

知識及び技能	思考・判断・表現	主体的に学びに向かう力
○自分の歌声や発音に気をつけて歌うことができる。	○「虫の声」をどのように歌うか思いをもっている。	○虫の鳴き声に注目し、積極的に歌唱活動に取り組んでいる。

4. 単元について

(教材観)

本題材では、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりに気付き、どのように歌うかについて思いをもって歌唱活動に取り組む。その中で、生活の中の音や音楽に目を向け、それらを歌唱表現に生かすことをねらいとする。そのため、子どもたちの身の周りに生息している虫の鳴き声と「虫の声」(文部省唱歌)の擬音語を比較する活動を設定する。それは、日頃、虫の鳴き声が雑音・騒音と化していると考えられるため、子どもたちにとって、虫の鳴き声が新たな音や音楽との出会いとなる。虫の声を「音や音楽」として捉えることで、子どもたちの音楽への関心を高めると同時に、自然や生き物への関心を高めることができる考える。

(児童観)

本学級の子どもたちは、音楽に対して関心が高く、音楽活動に積極的に取り組んでいる。そのため、「かえるのがっしょう」の学習において、歌詞の表す情景や気持ちに着目し、仲間と声を合わせて歌う楽しさを味わってきた。さらに、「だがつきパーティー」の学習では、打楽器一つひとつの音色に興味をもち、様々な楽器の音が重なることで生み出すハーモニーの面白さを感じてきた。このような子どもたちが、生活の中の音や音楽に注目し、それらの面白さや美しさを感じることで、どのように歌うか思いをもち、その表現を工夫する学習に取り組む。そうすることで、虫の声を騒音と捉えるのではなく、音や音楽と捉え、新たな視点をもつことにつながり、生活を明るく潤いのあるものにしていくという思いが芽生える考える。

(指導観)

子どもたちは、夜の虫の鳴き声をじっくり聴いたことがあるという経験は少ないだろう。この曲に出会った際、子どもたちから「くつわむしの本当の鳴き声ってどんな感じか知りたいな。」という発言があると考える。通常であれば、「くつわむしはこんな鳴き声なのだよ。」と準備していた音源を聴かせたくなるが、本題材では、虫の鳴き声の音源を聴く前に、生活の中に子どもたちの意識を戻していく。そうすることで、これまでじっくりと聴いたことのなかった虫の鳴き声やそれらが重なって聴こえることで感じる美しさ等の新たな視点を持ち、これからの音楽表現がさらに深まっていくと考える。このような姿を実現するために、以下のような支援を具体化する。

- 歌唱活動の中に、子どもたちの実際の生活の音である虫の鳴き声を鑑賞する活動を取り入れ、歌詞の表す情景について考える活動を設定する。そうすることで、歌詞の表す情景や気持ちから、どのように歌うか具体的な思いをもつことができるようにする。
- 仲間の歌い方の変化に気付いている発言に対し、その変化の理由を全体に問う。そうすることで、仲間の歌い方のよさに気づき、自分の歌い方に取り入れて歌うことができるようにする。
- 歌い方を考える過程で、意識した自分の歌い方を問う。そうすることで、自分の歌い方の変化に気づき、曲に合う歌い方で歌おうとすることができるようにする。

5. ESD との関連

(主に関連する ESD の価値観)

「虫の声」の歌詞に出てくる5種類の虫は、子どもたちの身の周りに生息している。それらの実際の鳴き声と擬態語で表現された歌詞を比較したり、虫の鳴き声を基に、どのように歌うか思いをもって歌唱活動に取り組んだり、それらに合う歌い方を考えたりしていく。このことを学習することで、生物多様性などの自然環境の保全を尊重することを重視することができる。また、そのよさは、子どもたちの自然や生き物への関心を高め、今後の自然や生き物に対する見方や接し方が変化してくるのではないだろうか。「虫の声」を学習することで、作詞者・作曲者が見た世界を、世代を越えて、感じたり、親しんだりすることができるため、世代内の公正と世代間の公正を重視することにもつながっていくと考える。

(主に関連する SDGs)

この題材は、「15 陸の豊かさを守ろう」を目標とし、また「15.2 : 2020年までに、あらゆる種類の森林の持続可能な経営の実施を促進し、森林減少を阻止し、劣化した森林を回復し、世界全体で新規植林及び再植林を大幅に増加させる。」をターゲットとする。小学校2年生という発達段階や音楽科の教科特性から、実際の環境に目を向け、その対策について考えることは難しい。そのため、虫の鳴き声の美しさや面白さについて着目することで、自然の豊かさから生み出されているということに気付くことができる。と考える。

6. 学習活動の概要

全2時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価 ・ 備考	ESD の視点	ESD の資質能力
1 歌詞の内容に着目し、歌う	・ 歌詞に出てくる擬音後の面白さについて考える場を設定する。そうすることで、歌詞のリズミカルな部分の面白さを感じ、歌う楽しさを味わうことができるようにする。	◇自分の歌声や発音に気をつけて歌うことができる。	多様性	コミュニケーション能力 長期的思考力
2 感じ取った曲想を基に、歌い方を考える	・ 身の周りの虫の鳴き声を聴き、どのような情景か問うたり、擬音語と比較するよう促したりする。そうすることで、どのように歌うかについて思いをもつことができるようにする。	◇「虫の声」をどのように歌うか思いをもっている。	有限性 公平性	コミュニケーション能力 協働的問題解決力

7. 成果と課題

子ども達に虫のイメージを問うと、苦手意識を持っていたり、夜の虫の声がうるさくて眠れないなどと嫌悪感を抱いたりしていることが分かった。虫に対してよいイメージが無い子ども達に、一方的に虫の写真を見せたり、鳴き声を聞かせたりすると、さらに楽曲に対してのイメージが下がってしまうと感じたため、子どもが必要感を持つまで提示は行わなかった。「虫の声」に出合い、聴いたり、歌ったりするうちに、擬音語や虫に興味をもっている発言があった。大半は、「クツワムシってどんな虫かな?」「近くにいなかな?理科の先生に尋ねてみようかな。」「本当に、ガチャガチャと鳴くのかな。」といった発言であったが、「1種類ずつの虫の声なんて聴いたことないよ。」という声が聞こえた。その発言を受け、生活や身の回りの音に注目して考えさせると、「虫の鳴き声って夜によく聴こえてくるよ。」や「歌詞では、一匹ずつ紹介してあるけれど、一斉に聴こえたらどんな音なのかな?」と、子ども達のすぐそばに、多くの生き物が共生していることに目を向けることができた。これまで、身の回りには、様々な「自然」「虫」に関わる音や音楽が存在しているが、それらに気づいたり、興味をもったりしたことはなかったが、第1時が終了した後、実際に虫の声を聴いてみた子どもが多かった。新たな目線で、音や音楽に着目し、自然と生み出されているハーモニーのよさに気付くことができた。本単元の学習の後、身の回りに棲んでいる生き物に興味をもったり、様々な音に興味をもったりした様子から、自然環境の保全を尊重しようとするESDの価値観として

は、効果があったと考える。

また、窓を開けて聴こえた虫の声をもとに表現について考えていくと、「虫の立場で聴いた虫の声と人間の立場で聴いた虫の声は違うよ。」と、2通りの表現方法があるといった考えをもった子どもがいた。虫バージョンで歌うよう促すと、元気に明るい感じで歌う子どもが多かったが、人間バージョンの際は、優しくきれいな歌声で歌う様子が見られた。子ども達は、曲想や歌詞の表す情景や気持ちとの関わりに着目することができた。しかし、虫の声に重点を置きすぎてしまったため曲想や音楽の構造との関わりが薄れていたようにも感じているため、今後「虫の声」の学習を行う際は、バランスを調整していく必要がある。